

## 査読論文

「文人書店」から近代的出版機構へ  
— 開明書店の歩み —

絹川 浩敏\*

## 要 旨

本稿は、現代中国の代表的出版社であった開明書店の歩みを、開明書店の出版部門の2人の責任者、索非と徐調孚に焦点を当てて、その成功の原因を探った論考である。出版業においては、経営・編集・出版発行の三部門それぞれの近代化が求められる。開明書店では、経営の章錫琛、編集の夏丐尊、葉聖陶の役割の重要性が語られてきたが、出版部門の充実も見逃せない。索非は戦後、台湾へ渡ったため、中華人民共和国では忘れられた存在であった。親友であった巴金の回想などにも明らかかなように、索非は、第一次上海事変以前に開明書店で重要な役割を果たした。また、徐調孚は、第一次上海事変以降の開明書店の発展に重要な役割を演じている。従来はあまり省みられることのなかった一編集者と作家との濃密な関係、編集者と作家が育ちあう関係を、開明書店という文学創造の場の中で、明らかにした。その編集者と作家の関係が、1930年代に隆盛を迎えたといわれる中国の「近代的出版業」を支えたのである。

## キーワード

開明書店、索非、徐調孚、出版業、民国

- 1, 28年の上海四馬路
- 2, 開明書店の出版部門の2人の責任者 索非と徐調孚
- 3, 35年の開明書店

## 1, 28年の上海四馬路

『申報』副刊「芸術界」（1929年1月6日）に趙景深が次のようなエッセイを掲載している。

私の家は閘北にあり、しょっちゅう人力車で駅まで、六路圓路の路面電車で五馬路棋盤街へ行き、書店をのぞき、新しい本はないかなと探す。おや、足が勝手に動く。まず、亜

---

\* 執筆者：絹川浩敏  
機関/役職：立命館大学経営学部 准教授  
連絡先：〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1  
E-mail：kinukawa@ba.ritsume.ac.jp

東へ、それから南に曲がって真善美、真善美書店からまっすぐ行って民智、商務、中華といった老舗へいかねばならない。中華から西がいわゆる書店街の四馬路である。書店がひしめいている。左に光華、楽群、春潮、北新、啓智、右には新文化、現代、群衆、世界、泰東、卿雲がある。これは、左派右派ではなく、光華と現代は洛陽娘のように仲良く隣り合っているし、春潮と楽群の若夫婦は、まだ2階で一緒に寝ている。群衆から北へちょっと曲がると新聞社街であるが、ここにも2軒の書店がある。新月と開明である。数えてみるとあわせて何軒になるかな。18軒である<sup>(1)</sup>。

趙景深はさらに宝興路から北四川路へ本屋めぐりをし、28年末で48軒の書店が上海にあったと証言している。

包子衍は、この証言を元に、さらに考察を加え、60軒ほどの本屋があったと推測している<sup>(2)</sup>。「書店街の四馬路」が形成されたのは、27年以降のことである。張静廬が光華書局を25年、四馬路に開店させたとき、ここは薬局街で、新書業の進出は初めてであったと述べている<sup>(3)</sup>。26年に北京から上海に進出した北新書局も、はじめは商務印書館近くの宝山路宝山里に店を構えるが、28年に販売所を四馬路に開設する。商務、中華、世界、大東の当時の四大書店も次々に四馬路に販売所を構えるようになっていく。『上海出版志』に掲載されている1912年以降1929年までに開設された書店74軒のうち、29軒が四馬路とその周辺に店を構えている。また、74軒のうち、24年までに開設されたのが28軒なのに対して、25年に6軒、26年に6軒、27年に10軒、28年に12軒、29年12軒と増加している<sup>(4)</sup>。張静廬の言う「新書業の黄金時代」が幕を開けたのである。

張静廬の言う「新書業」とはなにか。少し時代は下るが、1935年の証言を引いておこう。

「書店開設」ブームは、確かに1927年前後になってやっと始まった。これ以前に書店がなかったというわけではないが、今日のような新書店ではなかった。これ以前に書店を開く人がいなかったわけではなかったが、「書店開設」が知識人のブームではなかった。

(中略)

1927年前後の上海で、出版界に新たな刺激が生まれたのだ！泰東は当時まだみな注意を引くまでには至っていなかった。光華書局の成立、創造社出版部の創設、北新書局の南遷が、ついには「出版界のセンター」と呼ばれるようになる上海の出版界に、静かな沼に、小石をいくつか投げ入れたような波紋を呼んだことは間違いない。これに続いて、春潮、南強、楽群、新生命、開明、黎明などが続けざまに興り、「書店開設」のブームの最盛期がもたらされたのである。当時の一般青年の出版界に対する認識はこのために一変した。商務を唯一の書店の代表と考えなくなったばかりでなく、商務などは、以前の「山房」「書屋」という旧式の書店と等しいものとみなすようになった。古籍書店、古本業、新書

店が、3つの性格の異なったものとしてみなされるようになった<sup>(5)</sup>。

商務さえ、「旧式の書店」とみなされるようになっていたのだ。この「旧式の書店」と「新書業」の違いを明確に述べているのが、文学研究会の一員であった謝六逸である。

近年、上海の書店はだんだんと増えてきて、古本を売る店も何軒かある。(中略)文化の宣伝伝達事業の一つとしての書肆経営は、文化と野蛮とを分ける重要な基準とみなされている。私の偏見によれば、大きな通りすべてに一、二軒の意味のある書店と郵便局が一軒あれば、国家富強の予兆である。

文化事業の一つとして書店経営を考えれば、「トラスト企業」や「百貨店方式」の大書店がすべてを包摂してしまえるものではない。不幸にもこの10余年は、国内に大資本の書店は1軒しかなく、幼稚園の園児から「角帽」をかぶったことのない青少年まで精神的食糧は一樣に彼らの独占状態にあった。だから、著作翻訳をする人間はすべて彼らの顔色をうかがうしかなかった。「編集生殺与奪の権」を握った人物が、日本の鎌倉長谷の大仏のように高く聳え、威儀正しく座り、普通の「善男善女」は下から平伏して崇めるしかなかった。この比喩は決して言い過ぎではない。

現在の状況は違ってきており、小資本の書店が増加した。他の種類の本はわからないが、文芸方面の本に限って言えば、大書店の販売は往々にして小書店に劣っている。本が世に出るたび、大書店は必ず広告を載せるが、彼らは決して装丁、紙質、印刷面での工夫などには言及しない。なぜなら、元手と関係するからだ。一方、小書店は文芸書籍を刊行することを彼らの主な役割としている。彼ら自身も筆を取って著作した人物である。このため、装丁などよく研究改善している。彼らの儲け心は、大書店などよりいい面で作用している。この他にも、大書店の販売所は古いやり方をそのまま守っている(20年来、雑誌を郵送するのに、丸い筒にきっちり包んで来る。この一つの例で他は推して余りある)。すべての本を、高々と棚の上に並べ、棚の前には、「店員さん」が立ちはだかっている。店員の前には黒々とした高いカウンターが横たわっていて、本を買う人間は本の中身を自由にみることが出来ないことは言うまでもなく、小学生が本を買いに行くのに裁判所へ入るかのようだ。本を買いにきた小学生が紙片を持ってカウンターの前で叫んでも、誰も取り合ってくれないのを目撃した。このとき私はこぶしが震えるのをおさえきれなかった。このような場所では、欧州の中世の騎士の精神で蛮勇を奮うわけにはいかない。

少し「脱線」してしまった。話を戻すと、小書店の本は誰でも手にとって見てもよく、つぶさに見る機会がある。本を買うときに、はずれがあまりない。だから、学生達は小資本の書店が好きで、学生時代を過ぎた人も同じである<sup>(6)</sup>。

この文は、新書店として1928年に設立された陳望道の大江書舗の雑誌『大江』の創刊号に掲載されたものである。謝六逸は、「販売方法」「本の質」の面で「小書店」の優位性を述べている。販売方法とは、主に「座売り」から「立ち売り」への変化である<sup>(7)</sup>。

しかし、このブームは長くは続かなかった。創造社出版部は1929年に国民党によって閉鎖させられたし、光華と現代も1935年に相次いで閉鎖している。大江も雑誌は3号雑誌で終わり、書店そのものも1933年に開明書店に買い取られている。張資平の楽群は1928年の創業で1931年には閉鎖しているし、劉呐鷗・戴望舒・施蛰存の第一線書店（1928-29）、水沫書店（1929-31）、東華書店（1931-1932）は、国民党による閉鎖処分、検閲・発禁による経営不振、そして第一次上海事変での被害によって、最終的に劉呐鷗は出版事業を断念している<sup>(8)</sup>。

## 2. 開明書店の出版部門の2人の責任者 索非と徐調孚

開明書店も、1926年8月に設立された文人書店の一つである<sup>(9)</sup>。

創設者の章錫琛は、商務印書館の『婦女雑誌』主編であったが、1925年1月に「新しい性道德号」と題した特集を組み、魯迅の弟である周建人「性道德の科学的基準」、主編である章錫琛「新しい性道德とは何か」の2つの文章が、当時北京大学教授であった陳大齊から、北京大学の胡適派と見られていた『現代評論』で批判を受けた。王雲五らの商務上層部は、胡適ら北京大学との関係を重視しており、批判を受けた文章を問題視し、章錫琛は『婦女雑誌』主編の地位を追われた。章錫琛は、友人達の援助を受け、新しい雑誌『新女性』を26年1月に刊行し、商務印書館も辞職する。『新女性』は、数千部発行でき、『婦女雑誌』の読者を奪うが、雑誌一誌だけでは生活できず、さらに友人の援助と15年勤めた商務の退職金や弟の章錫珊の出資により、5千円の資本で、開明書店を始めることになる。

開明の初期の店員は5名であった。支配人の章錫琛、編集担当の趙景深、出版印刷担当の索非、校閲担当の王藹之、そして音楽美術担当の錢君匋である。章支配人は1889年生まれ、索非が1899年生まれ、趙景深が1902年生まれ、錢君匋が1906年生まれ、商務で編集者として15年勤務した章錫琛が大黒柱であるが、趙景深も文学研究会の初期からの会員であり、文学研究会のネットワークに連なっていた人物である。

開明書店は、よく知られているように、3つのグループの支持によって成り立っていた。文学研究会、立達学会、そして商務印書館での章錫琛の元同僚達である。この3つはそれぞれに重なり合っている。鄭振鐸、沈雁冰（茅盾）、葉聖陶、陳望道、趙景深などは、文学研究会の会員であるが、鄭振鐸、葉聖陶は商務印書館の同僚でもあった。文学研究会の機関紙『文学週報』は、21年5月に創刊され、当初は『時事新報』の副刊「文学旬刊」として発行されていたが、25年5月より、独立して文学週報社刊行の『文学』として発行されたものを、26年11月から開明書店で発行することになった。28年末までの約2年間は開明書店発行であり、4・12

クーデタ後の27年8月(276・277期合刊)から28年7月(325期)まで、趙景深が編集に当たっていた。立達学会とは、立達学園の教員達のグループで、立達学園は教育と労働の結合を唱えた中等教育学校である。ここの教員に、夏丐尊、匡互生、朱自清、豊子愷などがいた。夏丐尊が編集した立達学会の雑誌『一般』を、開明書店が編集費として百元払い、開明書店発行として出版された。夏丐尊、朱自清は文学研究会の会員でもある。夏丐尊は、『一般』の編集を1926年9月の創刊号から1927年4月の2巻4号まで行い、4・12クーデタをはさんで、1927年9月から3巻が発行されるが、編集は立達同僚の方光燾が引継ぎ、1929年12月の9巻4号まで出版された。商務印書館編訳所の元同僚には、胡愈之、周建人、王伯祥、周予同、徐調孚、顧均正がおり、胡愈之は立達学園の兼任教員であり、また彼らの多くが文学研究会の会員でもあった。

しかし、こうしたグループの同志的支えがあっても、金銭面では支えることは困難であった。商務印書館の瀋陽支店会計主任であった弟の章錫珊も共同経営者として、開明書店の経営に加わることになり、兄弟書店の性格を強めることになる。

「開明精神」「開明気質」という言葉がある。開明書店の堅実でかざらない書店員・編集者の様子から、作家・編集者から慕われた開明書店の性質を指してこう呼ばれている。

施蛰存は、翻訳した作品の出版先を見つけられず、開明書店の門をたたくことにした。

1927年の夏、私と戴望舒は開北の宝山路宝山里にあった半西洋式の建物をさがしあてた。入り口には「開明書店」という小さな看板が掛っていた。ドアを押して入っていったが、とても書店という様子ではなかった。一人の青年が我々を出迎えた。互いに名前を尋ねあって、それ以来生涯の友となった。この青年が実は趙景深なのであった。彼は当時開明書店の編集者で、原稿の閲読審査を専らの仕事として、校正の仕事も兼ねていた。また勤務外の時間に『チェーホフ小説集』を訳しもしており、これは開明書店から出版された。我々はしばらく歓談したのち、二つの翻訳原稿を残して分かれた。

一ヶ月もたたないうちに、我々は趙景深の手紙を受け取った。翻訳原稿が両方とも採用され出版されることになったと通知してきたのである。それは我々にとって大きな励みとなった。我々はそこで同人的性格の訳文叢書を計画し、「イ予叢書」と名づけた。「独り我が道を行く」の意味である<sup>(10)</sup>。

創設のころの新鋭の気迫が伝わってくる。

巴金も処女作を開明書店から出版している一人である。

『滅亡』は、『(小説)月報』誌上に掲載されたのと同じ年(1929年)に開明書店から出版された。原稿は索非が渡したもので、彼が編集した『微明叢書』中の一点として収めら

れた。このポケット版の叢書は、開明では全部で八点出版、その中には、他に索非の『獄中記』他、彼の作品三点、私の『死にゆく太陽』および私の訳した日本の秋田雨雀的一幕物『骸骨の舞踏』、ロシアのA・トルストイの多幕物『ダントンの死』などが収められた。最後の二つはいずれもエスペラントから訳したものである。そのほかに『ヴェラ』の一点があった。これは私が新たに訳した短篇小说(ヴェラ)と李石曾の旧訳四幕物『ま夜なかはまだ』を索非が一冊にまとめたもので、これらはいずれもポーランドの若い作家レオポルド・キャンプの作品である<sup>(11)</sup>。

索非の作品三点とは、『獄中記』と『囚人の書』、『苦趣』のことで、いずれも「A.A.Sofio」の名で1929年に出されている。索非は、巴金の親友で、5歳年上のエスペランティストであった。巴金によると、同じエスペランティストである胡愈之の紹介で索非は開明書店に入ったようである。1925年ごろは、北京の『国風日報』の副刊「学匯」の編集者をしていたようで、1925年5月14日の魯迅の日記に登場している。再び上海に来たのは1927年で、開明書店に入社したのが何月かはわからない。「再び」と述べたのは、索非は1919年に上海エスペラント学会の理事兼学会秘書となり、一時学会の日常業務を引き受けていたからであり、ここで胡愈之と面識が出来たと思われる。

巴金の回想によれば、索非はフランスから帰った巴金と一緒に暮らした。巴金は1929年の帰国当初は、索非のすすめで鴻興坊の上海エスペラント学会の事務所に半月ばかり寝泊りした。その後、閘北の宝山路宝光里で、新婚の索非が2階に、巴金が1階の客間に住むという同居生活が始まった。開明書店の編集者である索非が、作家に成りたての巴金を支えたのである。巴金自身が原稿を売り込みに行く必要はなく、彼はただ、「ペンを執って絶えず書き続けるだけだった。というのは、語りたいたいことがあり、自分の心の中にあるものを吐き出したかったからである。私は吐いても吐き切れない感情があるのを覚え、手中のペンを手放すすべがなく、よく、一晩徹夜して書くこともあった。文章を脱稿すると、昏々と眠り、原稿は机の上に置いておく。すると、索非が出勤のときそれを持って行くという仕掛けである。私は編集者に会いに行かず、私の本姓本名を知る人も少なかった。私は別に、文章のことで気を使うことがなく、どっちみち、読者が読みたければ、私の作品は発表・出版する場所があり、開明書店へ稿料が送られて来ると、索非が退勤のさい持って来てくれるのだった。(中略)私は、金銭のために著作するのではないから、売れ行きを見てものを書くという必要もなければ、人の顔色をうかがってペンを執るという必要もなかった。(中略)1932年以後は、私は索非との同居はやめたが、開明との関係には何の変化もなく、同書店との間の手紙のやり取りは索非が従来通りやってくれた。」<sup>(12)</sup>

なんと幸せな作家生活の始まりであろう。

1928年に開明書店は株式会社に改組される。資本金は10倍の5万円となる。夏丐尊が趙景深

にかわって編集責任者となるが、索非は依然として、出版部門の責任者として残っている。『私と開明』<sup>(13)</sup>に索非の上海在住の夫人が残していた写真が扉に掲載されている。索非を中心に、その右に章錫琛、2列目に巴金や王統照、顧均正ら、3列目に夏丏尊、林語堂ら、4列目に葉聖陶、徐調孚、錢君匋、胡愈之、茅盾、章克標、夏衍、謝六逸ら、当時の文壇の錚々たる顔ぶれがそろっている。いつの写真かはわかっていないが、巴金は、印税引き下げのための宴会のときの写真だったと「記憶する」。本来の税率は、初版が15パーセント、再版が20パーセントとなっていたものを、一律15パーセントにするために開いたものだった。「索非に聞くと、開明書店で印税が一番多くとっているのは、英語教科書の編者林語堂で、それに次いで夏丏尊だった。夏の翻訳した『愛の教育』は当時ベストセラーだった。この二氏が稿料引き下げに同意したので、他の人には異議のあるはずがなかった。私は、稿料の多少については、もともとどうでもよかった。ただ、本が、きれいに印刷され、装丁がきちんとできていさえすれば、それで十分満足だった。」と巴金は述べている<sup>(14)</sup>。

当事者の一人章克標も巴金の見方を肯定している。章克標は、索非について「彼はとても有能で、事務能力も高く、編集校正、出版、発行のすべてをこなし、しかも優れていた。」「態度は温和で友好的だが、気が弱いわけではなく、筋の通ったことを言い、少しも譲歩せず、自分の見方を堅持した。」「(この写真から)索非が確かに初期開明書店の重要な従業員だったことがわかる。」と評価している<sup>(15)</sup>。

1932年の第一次上海事変のとき、巴金は南京へ旅行中であった。すでに上海へ向う列車の中だったが、列車は丹陽で足止めをくい、南京へもう一度戻り、2月5日に船で上海に戻った。上海に戻ると、彼の住んでいた宝光里付近の宝山路にある商務印書館本部、印刷所と東方図書館は爆撃されており、閘北一带は日本軍に占領されていた。巴金は、たまたまフランス租界嵩山路の友人の開いている病院で、索非夫婦が二人の子供を連れて避難して来ているのに出会い、宝光里の家は、壊れていないけれども、周りは瓦礫だらけで、出入りが出来ないことを聞かされる。彼らは病院の3階に泊まり、巴金は1階に泊まった。次の日、巴金は歩高里の友人の家に行き、そこにしばらく住んだ。しばらくして、索非が閘北の住民が旧居に戻ってもいいということ聞きつけてきて、二人で宝光里の家から書籍を運び出した。鴻興坊の上海エスペラント学会の事務所も焦土と化していた。次の日から、中篇『海の夢』を書き始めた。完成した原稿は、索非の手で、『現代』編集長施蛰存に渡され、1932年5月の創刊号から3回連載される<sup>(16)</sup>。

商務印書館は日本軍により大きな被害をこうむった。雑誌は軒並み停刊し、『東方雑誌』のみ継続発行され、『小説月報』『婦女雑誌』『教育雑誌』『学生雑誌』は、『東方雑誌』の一つの欄に格下げされた。このときに、商務印書館に残っていた開明を支えた同志達が次々に開明に入社してくる。1930年にも増資して十万元にし、章の妹の夫に印刷所を経営させ、開明の印刷物を専門に印刷させていた。33年頃の、施蛰存が、雑誌『現代』の編集長として活躍していた

時期に、四馬路に移っていた開明書店編集部の印象を次のように述べている。

その頃の開明書店の編集部は私には羨ましい環境であった。広い一間の前後に窓があって、編集者は一人ずつ窓際に書き物机を持っていた。私の狭くて暗い閣樓の編集室とは天地の差があった。葉紹鈞と夫人が向かい合わせに腰掛け、『十三經索引』の稿本の切り貼りをしている情景が今でも目に浮かぶ。

徐調孚はかつて沈雁冰や鄭振鐸を助けて『小説月報』の編集をしていた。この大型文芸月刊誌の編成と校正の仕事はほとんど彼がやったのである。開明書店に入ってから、月刊『中学生』など多くの書籍や刊行物は、原稿依頼、審査、組版、校正、刷り見本のチェックなど一連の作業を彼がやった。しかし彼の名前が印刷されている本は一冊もない。彼は編集者としては無名の英雄であった。けれども文芸界の人々は誰でも彼の人となりを知っている。彼はこつこつと仕事に没頭するタイプで、才をひけらかし、自分を持ち上げることをしなかった。王国維の『人間詞話』を整理するに当たっては、夜間にランプのもとで、ひそやかに机に向って一気に書き上げた。出来上がるまで誰もそのことを知らなかったのである。

徐調孚の紹介で私の散文集『灯火集』は開明書店から出版された。開明書店創業十周年に際して『十年』という小説集が出されたが、そこには私の「嫡裔」という小説が収められている。これも徐調孚に依頼されたもので、彼が何度も催促してくれなければ、この小説は恐らくこの世に存在しなかったであろう<sup>(17)</sup>。

32年入社組の重要な人物が徐調孚である。文学研究会では、施蛰存の言う『小説月報』編集補佐の役割だけでなく、『文学週報』326期以降の8人の主編の一人となっていた。

また、彼は単著こそ『中国文学名著講話』のみであるが、李秀萍の調査<sup>(18)</sup>によれば、『小説月報』と文学研究会の機関紙に作品を発表した数は、1921-31年7位、1921-1925年15位であった。鄭振鐸1位、沈雁冰2位、趙景深3位、王統照4位、謝六逸5位、樊仲雲6位に次ぐ多さである。彼は、児童文学の翻訳も多く、『ピノキオ』やアンデルセン童話を訳し、特に28年発売の『ピノキオ』は開明書店のベストセラーとなった。徐調孚は「作者の知音（才能がよくわかる人）」と呼ばれ、作家との関係がよかったばかりでなく、植字工や印刷工との関係もよく、労働者の技術水準もよくわかっていた。索非との関係もよく、出版部門でよく協力したといわれている。章克標も「開明書店から出版された文芸関係の本は、その多くは徐調孚が手がけたものだ。彼は文芸界の友人との交際が多く、顔も広かった。彼らの信頼を得て、文学研究会の同人、茅盾らの作品はみな彼が自ら手がけ、開明から出版された。彼は開明で出版部門を管掌していたが、植字の面でも役割を發揮した。」<sup>(19)</sup>と評価している。



### 3, 35年の開明書店

開明書店といえば、経営者としての章錫琛、編集長としての夏丐尊、葉聖陶の功績がまず挙げられる。しかし、作家が出版社に期待し、読者も出版社に期待したのは、「装丁、紙質、印刷面での工夫」であり、「本が、きれいに印刷され、装丁がきちんとでき」ていることだった。開明書店は、誤植の少ないことで評判の書店であった。この功績は、出版部門がしっかりしていたことによる。経営・編集・出版発行の三者がともに優れていて初めて、産業としての近代的出版業が確立される。

28年前後に創業されたいわゆる「文人書店」で事業の持続に成功した書店は数少ない。開明書店が、出版社として、出版業として事業に成功したのは、出版発行の分野で人材を得ていたことが大きな要因であった。索非や徐調孚の役割は見直されてしかるべきである。

開明書店は、1930年5万元、31年に10万元、33年に5万元と増資を繰り返す。資本金25万元の規模となり、大江など経営に行き詰った「文人書店」を合併し、規模拡大を図る。

しかし、会社としての発展とともに、33年ごろからは出版社としての積極性は失われていく。宋雲彬によれば、以下のような大企業病にかかったようである。「おおよそ33年ごろから、開明は各種の規則と制度を制定し始め、次々に公表した。これらの規則制度はほとんどが商務からの引き写しで、多くが丁暁先の起草により、会議を通過したものだ。猿真似もいいところで、どっちつかずなものであった。そのとき会社は、100人あまりの従業員しかいないのに、組織系統を3つの所、1つの室、18の部、33の課と4つの委員会に分けていた。労働者は毎日午前と午後出勤時に署名し、サボれば減給された。そのほかに各種の細かい規定があった。こうして以来、それまでの温かい雰囲気は一掃されてしまった。その時、私はすでに開明に入社しており、錫琛と話し合ったことがある。このようなやり方は利点もあるが弊害も多い。その弊害は、同僚達の積極性を挫きがちなことだ、と意見したが、錫琛らの見方は私とは違っていた。こうしたやり方こそが、資本主義の発展法則に則ったものだとか。本来、厳密な内部組織が、分業協力をしっかりやるために、規則制度を定めることは必要でもある。しかし、実情に合わせたものでなければならず、開明の特長を考えれば、あの良き伝統をいかに守り、同僚達の仕事への積極性をいかに発揮させるかを考慮しなければならない。だが、錫琛らはまったくこれらのことは考慮せず、一途に商務や中華のようになることだけを考えていた。錫琛は葉聖陶がなぜ商務を抜け出して、開明で編集者をしているのか想像すらしなかった。当時の開明の大多数の同僚は、錫琛らのこうしたやり方に反感を覚えていた。しばらくすると、聖陶は故郷蘇州に家を立て、一家で移って行ってしまった。彼は、開明をやめはしなかったが、毎日出勤することはなくなり、一月に1、2度上海に来るだけだった。」<sup>(20)</sup>

1935年5月11日の『申報』副刊「出版界」第5期の「各書局印象記(続)」で、「しかし、不景気が新書業を覆っている。開明も、商務のように超然としてその影響を受けないというわけ

にはいかない。最近の二十五史等大部な旧書の印刷発行のその意味は、開明がより進歩したというわけではなく、逆に開明は新書出版の点ですでに枯渇していることであり、現金を回収するために、大量の本で「予約」販売せざるを得なくなっているのだ。その次に、初期の開明は「章氏家族」に似た「家内工業的」な経営であった。しかし、今は開明の規模も拡大し、内部の関係も複雑になり、必然的に経費も大いに増加している。出版面で別の新たな活路を見出さなければ、開明の危機ではないかといわざるを得ない。」と、李衡之に批判されている。

1935年から36年にかけて、出版界のパラダイムが変わろうとしていた。生活書店、新知書店、読書生活出版社という、のちに三聯書店にまとまる進歩的出版社が現れていた。芸文面では、より理想を追求した文化生活出版社が巴金を編集長に迎え創業される。1936年には、商務印書館も座売りから立ち売りへの転換を行った。良友図書公司も趙家璧が『中国新文学大系』を発行し、雑誌『良友画報』で一時代を築きつつあった。30年から32年にかけて落ち込んでいた出版点数も、33年から急回復をみせ、36年にはピークを迎えた<sup>(21)</sup>。

開明も36年に資本を、さらに5万元増資し、合わせて30万元に拡大し、反撃のチャンスを持った。しかし、1937年の第2次上海事変によって歴史は大きく動いていく。開明書店の再生は、章錫琛や夏丐尊ではなく、范洗人という新たな人物によって担われることになるが、37年以後の開明書店については、別稿を立てて考えてみたい。

## 注

- (1) 趙景深「十七年度中国文壇的回顧」『申報』副刊「芸術界」(1929年1月6日)
- (2) 包子衍「1928年間上海的書店」『魯迅研究動態』1988年第11期、『中国出版史料 現代部分』第1巻下冊 山東教育出版社, 2001年4月所収。
- (3) 張静廬『在出版界二十年』上海雜誌公司, 1938年, 上海書店, 1984年9月影印, 江蘇教育出版社, 2005年7月再版。
- (4) 『上海出版志』上海社会科学院出版社, 2000年12月
- (5) 李衡之「書店雑景」『申報』副刊「出版界」1935年10月5日
- (6) 謝宏徒(謝六逸)「大小書店」原載『大江』創刊号, 1928年10月, 未見, 『謝六逸文集』陳江陳庚初編 商務印書館, 1995年1月所収。
- (7) 日本では、座売りから立ち売りへの変化は、明治43年(1910年)のころのころのようだ。(小田光雄『書店の近代』平凡社新書, 2003年5月参照)。なお、中国では、日本のように書店と取次ぎと出版社の機能分化が進まず、特に上海では出版社が自ら販売所を経営し、取次ぎの機能は、地方の大手書店が兼ねていた。(拙稿「中国における近代的出版業の展開」金丸裕一編『近代中国と企業・文化・国家』ゆまに書房, 2009年3月参照)。よって、本論では、「開明書店」のように固有名を尊重し、出版社という言葉をあまり使わない。34年以降、読書出版社や文化生活出版社など「出版社」を名乗るものが増えていく。

- (8) 3つの書店については、施蛰存「我們經營過的三個書店」『沙上の足跡』遼寧教育出版社1995年3月、青野繁治訳『砂の上の足跡』大阪外国語大学学術出版委員会、1999年2月、参照。なお、劉呐鷗については、三澤真美恵『「帝国」と「祖国」のはざま』岩波書店、2010年8月参照。また、第一線書店について、施蛰存は28年12月に営業を停止させられたと述べているが、倪墨炎は、国民党政府の档案から早くとも29年1月か2月であることを考証している。倪墨炎「第一線書店の停業」『現代文壇災禍録』上海書店出版社、1996年12月
- (9) 開明書店については、『私與開明』中国青年出版社、1985年8月、この中の、特に唐錫光「開明的歷程」参照。また、周佳榮『開明書店與五四新文化』（中華書局（香港）、2009年4月）が全体的な知識を与えてくれた。経営者であった章錫琛、編集長であった葉聖陶については、馮春龍『中国十大出版家』（広陵書社2005年11月）が基本的な知識を与えてくれた。夏丐尊については、夏弘寧『夏丐尊伝』（中国青年出版社、2002年1月）、平屋之輯『夏丐尊文集』（浙江人民文学社1983年2月）参照。また、『20世紀中国著名編集出版家研究資料匯輯』（河南大学出版社2005年9月）の第2輯に夏丐尊と章錫琛が、第3輯に葉聖陶が、収められている。章錫琛については、『章錫琛先生誕辰一百周年紀念文集』（出版史料編集部編・発行、1990年10月）がある。

また、以下で記述する開明書店の編集者・社員は、『民国人物大辞典増訂版』（河北人民出版社2007年1月第2版）など、各種辞典に記載があるが、索非のみ、戦後、妻子を上海に残し台湾へ移ったためか、管見の限り辞典類に記載がない。

索非は、1899年生まれ、安徽省績溪の人。原姓は周。早くから、無政府主義の活動に従事し、無政府主義の刊行物『徵明』半月刊主編。1925年に巴金らと無政府主義の団体「民衆社」を組織し、北京で『国風日報』の副刊を編集。1927年に上海に来て、開明書店入社、主に、印刷・出版・発行の諸事にかかわり、幹部となる。1937年の第2次上海事変後も、章錫琛らとともに、上海にとどまり、戦後、范寿康に誘われ、台湾に移り、書店経営などを行う。1988年没。

本文で触れるように、巴金が回想に残しているほか、魯迅の息子周海嬰が『魯迅與我的七十年』（南海出版公司2001年9月）で、「索非先生」の節を設けて、回想している。

また、李樹徳「巴金與索非」（『点滴』2009年3期）など、巴金に關係する論文に索非への言及があり、索非の息子鞠躬による「私的父親索非」という文が、『中国科学小品選』に収められているというが未見。

- (10) 「開明書店のこと」『砂の上の足跡』遼寧教育出版社1995年3月、青野繁治訳 大阪外国語大学学術出版委員会、1999年2月。
- (11) 巴金「私與開明」『無題集』人民文学出版社、1986年12月、石上詔訳、筑摩書房、1988年5月。
- (12) 同上
- (13) 『私與開明』中国青年出版社、1985年8月。
- (14) 注(11)と同じ。

- (15) 『章克標文集 下』上海社会科学出版社, 2003年1月.
- (16) 徐開壘『巴金伝』上海文芸出版社, 1991年5月参照.
- (17) 注(10)と同じ.
- (18) 李秀萍『文学研究会與中国現代文学制度』中国伝媒大学出版社, 2010年6月
- (19) 注(15)と同じ.
- (20) 宋雲彬「開明旧事」原載『文史資料選輯』第31輯, ここでは、『章錫琛先生誕辰一百周年紀念文集』(上掲)所収のものによった. ここで言及されている開明書店の細かな規則については、『民国書業經營規章』(上海書店出版社, 2006年8月)で見ることが出来る.
- (21) 王建輝「1935-1936年: 中国近代出版的高峰年代」『武漢大学学报(人文社会科学版)』第53卷第5期2000年9月, cnki 参照. 出版点数はピークに達したが, 「新書業の日ごとの衰退は鉄の事実であり, 昨年の年末いくつもの書店が, 上海の外の都市からの掛け取りは1割にも満たなかった(例えば, 外地に)一万元つけがあるとしたら, 年末に回収できたのは一千元に満たないのだ. これは何たる重大な事実であろうか.」(顧鳳城「新書業的衰落及其前途」『申報』副刊「出版界」第65期, 1936年7月23日)という証言もあり, 経営が楽になったわけではなかった.

## The Modern Publishing Industry: The Kaiming Bookstore

Hirotoishi Kinukawa \*

### Abstract

This paper investigates the causes behind the success of two persons, Suofei and Xu Tiaofu, in charge of the publication section of Kaiming Bookstore, a typical publisher in present age of China. In the publishing industry, the modernization of each of the three sections of management, editing, and publication is required. The importance of the roles of Zhang Xichen as a manager, and Xia Mianzun and Ye Shengtao as editors, in the Kaiming Bookstore has been noted. However Suofei and Xu Tiaofu have developed the publication section. Suofei has been forgotten in the People's Republic of China, because he moved to Taiwan after World War II. Suofei played an important role in the Kaiming Bookstore before the First Shanghai Incident. Xu Tiaofu performed an important role in the development of Kaiming Bookstore after the First Shanghai Incident.

This paper reveals the close relationship between editor and writer which developed in the space of creative literature that was Kaiming Bookstore. The editor-writer relationship supported the “modern publishing industry” which enjoyed prosperity in the 1930s in China.

### Keywords

Kaiming Bookstore, Suofei, Xu Tiaofu, Modern publishing industry, History of the Republic of China

---

\* Correspondence to : Hirotoishi Kinukawa  
Associate Professor / Faculty of Business Administration, Ritsumeikan University  
1-1-1 Noji-higashi, Kusatsu, Shiga 525-8577 Japan  
E-mail : kinukawa@ba.ritsumei.ac.jp

